

善照寺
寺報

ぜんしょうじ

第9号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺
電話 四七(三五七)二二三三二
FAX 〇四七(三九七)一三三二

天下和順 日月清明
風雨以時 災厲不起
國豊民安 兵戈無用
崇徳興仁 務修禮讓

善照寺住職 今岡達雄

皆様、明けましておめでとございます

毎年、私の個人的な年賀状では経典から言葉を選んで、年末から年頭にかけての世の中の動きに關しての感想を述べています。今年の言葉は「**兵戈無用**」です。

無量寿經という経典には阿彌陀仏が仏になられたこと、私たちをお救いくださることが書かれています。その無量寿經の後段には表題にした「天下和順・・・」と書かれています。特にこの部分を「祝聖文」と呼

んでお目出たい法要のときのご回向に使っています。現代語に訳しますと次のような意味になります。

「仏の教化を受けた国や村は平和になって、日も月も清く輝き、風雨も時になつて程よく、災害や疫病はおこらず、国は富み民は豊かになって、兵や兵器を用いることなく、人びとは徳をあげ仁を尊んで、礼節や謙讓の道を守るようになるのである。」

兵戈無用とは「仏の教化が行き届いた国では、武力を使う必要がない」ということです。

法然上人は九歳の時、政敵の夜襲に逢い父を亡くされました。その時にお父さんは次のような遺言を残されました。「このような事態になつたのは、昔からの縁に依つていゝのだから敵の人をうらんではいけない。もし恨みを果たしたならば、あだ討ちは代々に続き尽きることがない。お前は出家して私の菩提を供養し、自ら悟りを得るようになさい」云々

法然上人の時代には仇討ちは遺族として当然行ふべきことでした。目の前で父を殺害され、犯人もわかつていゝのに仇討ちの出来ない悔しさは大変なものであつたでしょう。しかし、法然上人は父の遺言に従い、仇討ちせずに出家して僧侶になりました。仏教における平和とはどんな事があつても絶対戦わないうことであり、法然上人は身をもつてそのことをお示しなつておられます。

合掌

年間行事予定

平成十六年善照寺の年間行事の予定は次の通りです。皆様方は是非ともお参りいただければ幸いです。

初念仏会 一月十七日(土)

一時 法話 二時 法要

お彼岸春(三月十七〜廿三日)

お盆 東京(七月十三〜十五日)

地元(八月十三〜十五日)

施餓鬼会 八月十七日(火)

一時 法話 二時 法要

お彼岸秋(九月二十〜廿六日)

お十夜会 十一月十七日(水)

一時 法話 二時 法要

暮れ 十二月下旬

除夜の鐘 十二月三十一日

夜十一時三十分位から始めます

住職法話

宗祖 法然上人

誕生逸話（かたきを打つな）

法然上人は長承二年（一一三三）美作国久米郡稻岡（岡山県久米郡久米南町）に漆間時国の長男としてお生まれになりました。父の漆間時国は今の世の中で云うところの地方の有力者で警察署長を兼ねていました。そして貴族所有の莊園の管理官である明石定明との間にトラブルを抱えておりました。勢至丸

（法然上人の幼名）九歳の永治元年（一一四一）、明石定明の軍勢による夜襲を受け、父時国は瀕死の重傷を負いました。時国は翌日枕元に勢至丸を呼び「汝、さらに会稽の恥を思い、敵人をうらむ事なかれ。これ偏に先世の宿業也。もし遺恨をむすばゞ、そのあだ世々につきがたかるべし。しかし俗をのがれ

家を出て我菩提をとぶらひ、みづからの解脱を求めん」といつて、西に向かつて座り、合掌して佛を念じ眠るがごとくして息絶えたのでした。この父の遺言の意味は前頁に述べたと通りです。「かたきを打つな」「僧侶になれ」「悟りを得よ」これが父の遺言であり勢至丸はそれに従ったのです。

なんと口惜しかったでしょう。その悔しい気持ちを悟りを得るための努力に一心にふり向けたのです。

悟りを求めて

勢至丸は母の弟で僧侶であった観覚の元で出家し、那岐山で修行に励んでいました。しかし観覚は勢至丸のたぐいまれなる才能を見抜き、比叡山に登ることを勧めました。母にいとまを告げ比叡山に登ったのは一一四五年十三歳のときで持宝房源光の弟子となりました。十五歳の時戒壇院で戒を受け、十七歳の

時に師源光は当時比叡山で最も権力のあつた皇円に指導を委ねたのですが、十八歳の時に皇円の元を去り、黒谷に移つて慈眼房叡空に師事しました。

当時の比叡山は現在の国立大学のようなところで、全国から優秀な人材が集まつてきた所でした。その中でも皇円の指導はエリートコースでした。しかし、当時の比叡山は悟りを得るためでなく立身出世の競争が激しい場所でありました。勢至丸は自分から立身出世のエリートコースを捨て、自らの悟りを求めるため皇円の元を去り、比叡山の隠遁所である黒谷の慈眼房叡空に師事することにしたのです。このとき最初の師源光の源と叡空の空を採つて法然房源空という名がつけられました。

立教開宗（平等な教え）

保元元年（一一五六）法然上人二十四歳のときから比叡山黒谷を下つて京都や奈良の寺院を

回り高僧に訪ね、必死に悟りの道を求めました。しかし、その結果はだれ一人として法然上人の問いかけに心ゆくまで教えをたれる方はいませんでした。そのたび毎に重い足を引きずりながら黒谷に戻り、報恩蔵に戻つて一切経を読み返し、実践に励みました。しかし「自分は悟りに必要な三学（戒・定・慧）が整つた者ではない」ことを痛感するばかりでした。

このような報恩蔵での長い長い修学生活の中で、唐の善導大師の『観経疏』散善義にある「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、是れを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」の一文を見て、阿弥陀仏の名前を唱えるという専修念仏によつて万人が救われる道を見いだしたのでした。時に承安五年（一一七五）春三月、法然上人四十三歳の時でありました。（合掌）



御前様のお念仏

法然上人のおことは

「念仏をひまなくとなえること
さえできれば、阿弥陀仏からの
救いは確実と知れ」

(『諸人伝説の詞』より)

新しい年になり、思いかえせ
ばもう六年も前の夏。

私は研究者の卵としていろいろ
の苦心しておりました。大学院
での生活は二年目でしたが、思
い描いていた生活とは違い、生
命現象の研究はまるで宝さがし
のようなもの。いろいろ工夫し
てもうまくいかないことだらけ
だったのです。

こういうと不謹慎かもしれませんが
せんが、僧侶になるためのきび
しい三週間も、そんな私にとつ
ては、俗世から解放される安ら
ぎのひとときでした。

増上寺は徳川家ゆかりの大き
なお寺で、東京タワー近くの芝
という土地にあります。今は赤

や白のきらびやかな建物がなら
んでいますが、当時はうす汚れ
た会館に泊まり、古びた食堂で
食事をしておりました。

そのとき私は、ある係をおお
せつかつておりました。
た。人より早めに本
堂に行つて、ロウソ
クやお線香やお仏飯
の用意をしたり、講
義の先生にお水をこ
用意したり、人が
去つたあとの道場を
片づけたりする係で
す。

増上寺は大本山の
ひとつで、その住職
は御(ご)前(ぜん)様
と呼ばれます。当時
の御前様は、今はす
でに亡くなられた、
藤堂恭俊先生という
方でした。

藤堂先生は開講式や朝の勤行
などで私たちの前にいらつしや
ると、式の最中でもいつも口の

仏さまからの手紙

中で「なむあみだぶ…」と繰り返して
返しておられました。それを友
人の中には「ポーズをつけてい
るだけだよ」とけなす者もあ
り、またそんな風に見えなくも
ないのです。

ある朝、私は係の仕事のた
め、みんなより一足はやく本堂
について、裏堂でロウソクやお
香の準備をしていました。

誰もいない本堂の裏は、天井
が高く広々しているせいもあつ
て、妙にしんと静まりかえつて
います。ロウソクに火をつける
マツチの音が、やけに大きくひ
びきます。お線香からは、白い
煙と香りがただよいます。

そのときどこか遠くから、人
の声が聞こえたような気がしま
した。気のせいかな、と思つて
いると、とびらの開く音がして
誰かが入ってきたようです。

「なむあみだぶ、なむあみだぶ
…」

その大きな声にびっくりした
私は、火のついたお線香を持つ

たまま、思わず裏堂から退散し
てしまいました。その声の主こ
そ、勤行のためにお出ましに
なつた藤堂先生だったのです。

先生は確かにひとりていらつ
しゃつたのに、いつもより大き
な声でお念仏をしておられたの
です。それはほかでもない、先
生のお念仏がただのポーズでは
ないことの証拠でした。

私は、先生のお念仏がポーズ
にすぎないと思つた自分を恥じ
ました。そして、法然上人のお
しえをそのままに実践する人が
この現代にも存在することを、
生まれて初めて知つたのです。

もちろんただこれだけで、冒
頭に申し上げた私自身の問題が
解決されたわけではありませ
ん。けれども藤堂先生のお念仏
との出会いは、私にとつて貴重
な体験となりました。

私はそのとき、少なくとも藤
堂先生の心の中では、阿弥陀様
がありありと実在しているのを
直感したのです。
(副住職)

お寺との付き合い

お寺との付き合いで忘れてはならないのが「法事」です。今回は法事を実施するときに注意すべき事をメモしてみました。

年回法要

主な法事は年回法要です。亡くなった翌年が一周忌、その次の年が三回忌になります。その後は七回忌、十三回忌、十七回忌、廿三回忌、廿七回忌、卅三回忌と続きます。昔は卅三回忌を「甲いあげ」と呼んで最後の年回法要とし、これ以降は先祖代々としてご供養していたようです。

昔は平均寿命が短く親の卅三回忌を営むのは難しかったのですが、近年長寿命化が進み親の五十回忌を営むことも出来るようになってきました。そこで、年回法要も卅七回忌、四十三回忌、四十七回忌、五十回忌も営むようになってきました。

多くの寺院では年回のお知らせをしているようですが、善照寺では年回予定を通知していません。左記の年回表を見て確認して下さい。

年回表	平成十六年	平成十五年	平成十四年	平成十年	平成四年	昭和六十二年	昭和五十七年	昭和五十三年	昭和四十七年	昭和四十三年	昭和三十七年	昭和三十三年	昭和三十年
一周忌													
三回忌													
七回忌													
十三回忌													
十七回忌													
二十三日回忌													
二十七回忌													
三十三回忌													
三十七回忌													
四十三回忌													
四十七回忌													
五十回忌													

日程の打合せ

年回法要は命日を過ぎない日に行います。お位牌で命日を確認し、家族と相談して大体の日程を考えて寺に来て下さい。おおむね命日の前の日曜日に決められることが多いようです。法事の予定が

他の檀家様と重なる場合も有りませので早めにお申し込み下さい。

親族・知人への案内

法事の日程が決まったら、親族・知人やお世話になった人々に案内をします。お呼びする方々をどの範囲にするかは主催者の考えで決めましょう。ご案内時には出席と参加人数、塔婆供養の有無を聞いておくと良いと思います。

寺への通知

法事予定日の一週間前までに塔婆供養のお施主名と大体の参加人数をお知らせ下さい。施主名は紙に書いて下さい。また、読み方の難しいお名前には「ふりがな」をつけて頂けると有り難いです。

法事当日

法事の当日は開始時間の十五分前位に客殿にお集まり下さい。一般的には法事が始まる前に寺務所でお布施と塔婆代をお納められるようです。

(つづく)

編集後記

一昨年の編集後記には、新年の決意として、もつとお念仏と共に過ごしていきたい！とした私でした。我が家では就寝前に家族でお念仏するのが日課になりつつあります。とても疲れた日には、今日はお念仏はパスして寝てしまいたいと思う時もありますが、もうすぐ二歳になるわが子が小さな手を合わせて、副住職と一緒に片言で「ナンマンマン…」とお念仏を唱え始めると、とてもうれしく楽しくなってきました。一緒にお念仏をお唱えしたくなります。このような状況が手伝って、昨年はお念仏をお唱えするのが楽しいひと時となり、よいお念仏がお唱えできたのではないかと思えます。法然上人の一日七万回のお念仏には程遠いですが、本年も引き続きよいお念仏と共に過ごしていきたいものです。皆様、本年もよろしくお願います。

(副住職室 久美英)